

二葉亭四迷の翻訳における「純粹言語」die reine Sprache としての「た」形

コックリル浩子

本発表は、昨年アメリカの日本語教員協会誌『日本語と日本文学』(Japanese Language and Literature)に掲載された拙論を基にしておこなうものである。ここでは、二葉亭四迷の翻訳作品、中でも、ツルゲーネフとゴーゴリの作品の翻訳における文末詞「た」形の用法について考察した。論文中で扱ったのは、まず、二葉亭の処女翻訳出版作品である『あひゞき』(1888年)『めぐりあひ』(1888年~1889年)、及び、初稿の発表から八年後に出版された改稿『あひびき』『奇遇』(1896)の四作品。これらは、いずれもツルゲーネフの小品の翻訳である。次に、ゴーゴリの作品からは、二葉亭のゴーゴリものの初訳である『肖像画』(1897)を取りあげた。

二葉亭は上述の諸作品を「忠実に逐語訳する」過程で、二つの相異なる文体を創り出すことにより、近代日本文学に貢献したと考えられる。一つは、ツルゲーネフ作品の処女翻訳作品の初稿『あゞびき』と『めぐりあひ』の中に見出される文体で、過去時制を表わす文末詞「た」の使用を最大の特徴とするものである。この文体は日本自然主義者たちの作品に多大な影響を与えた。もう一つは、改稿の中で試みられた文体で、ここでは、文末詞「る」形が「た」形の数を上回り、数を限定された「た」形は、主に完了相を表わしている。この完了相を表わす「た」の使用を特徴とする文体は、二葉亭のゴーゴリものの翻訳の中で最大の効果を発揮した。また、これら二つの文体はそれぞれ、ツルゲーネフとゴーゴリの「純粹言語」を解放したものと考えられる。

コックリル浩子は、オーストラリアのクィーンズ大学で長年教鞭をとったあと、昨年7月からシドニー大学で日本語を教えている。ロシア語から日本語への翻訳文学作品の研究、及び、近代、現代文学に関する幾つかの論文がある。又、2006年にイギリスのセント・ジェローム社から、『翻訳における文体と語り：二葉亭四迷の貢献』と題する本を出版した。現在は、主に、二葉亭四迷のロシア文学翻訳の継承者である、瀬沼夏葉、昇曙夢、中村白葉、米川正夫の翻訳作品を分析している。